

## 第2回 留萌圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会 議事録

日 時 令和6年（2024年）1月16日（火） 13：30～15：30

場 所 北海道留萌合同庁舎 2階講堂

出席者 別紙議事概要のとおり  
推進員1名、委員5名、参考人7名、事務局4名 計17名

議 題 1 講話 一人ひとりの違いを認め、支え合うコミュニティを目指して  
2 意見交流

### 課長挨拶（加藤課長）

- この委員会は、障がいを理由とする差別や不利益、暮らしづらさ等の申し立てがあった場合に招集され、問題解決に向けてあっせん案を協議し解決に向けて導いていくという役目を担っている。
- 本日は、本委員会の事務局に参画いただいている特定非営利活動法人ウェルアナザーデザイン代表の地域づくりコーディネーター小野尚志様から、「一人ひとりの違いを認め、支え合うコミュニティを目指して」をテーマに、いじめ問題や多様性、シンキングエラーについてなど、幅広い視点からお話をさせていただくこととした。
- 広く「障がい」や「合理的配慮」について見識を深められる場であるとともに、障がいのあるないに関わらず、誰もが安心して暮らせる社会にしていけるよう、活発な意見交流をする場にしていきたい。
- それぞれのお立場や豊富な経験を踏まえて、積極的にご提言をいただくとともに、留萌管内の福祉の充実、向上に取り組んでまいりたいのでご協力をお願いしたい。

### 議 事

(1) 議題1 一人ひとりの違いを認め、支え合うコミュニティを目指して  
(地域づくりコーディネーター小野尚志氏)

- 相談員としての役割について
  - これまで構造設計士として事業所の設計に携わった経験から、建物を支える土台や杭の重要性は認識していた。  
ソーシャルワークも同様で、対象者の思いや願いが大きいほどそれを支える相談者側の基盤も求められるため精神保健福祉士を取得した。  
過去が積み上がった現在に未来（思いや願い）が創造される。
- 人々の多様性をサポートする「い」場所づくり

- 自立とは誰かに頼らないことではなく、依存先を拡散すること。  
例えば依存の対象を親から先生、友人と広げていくこと。  
相手を尊重しながらお互いに支え合いながら助け合う関係づくりが大事。  
よい依存は相手とのほどよい間合いがある。
  - 依存先としての「い」場所は愛情・承認・活動の保証を目的としている。
  - みらくる（地域支合いサロン）設立も不登校中の生徒の居場所づくりから始まった。  
「みらくる」はその生徒が名付けた。  
皆が来るという意味と自分のようなミラクルが起きることへの願いがこめられている。
- 生徒向け講話の実践
- 各学年（小学校5年～高校1年）に応じた講話を行っている。
  - 小学生には「不安や悩みとの向き合い方」を、中学生には「自分を知ること」から「援助を求める事」、「援助を受ける力を高めること」、そして「社会の中の自分」の認識と適応という段階で発展させた内容の講話を行っている。
- 「いじめ」の考察
- 小中校のいじめの認知件数は61万件、前年比で7万件増加している。  
内訳は小学校が最多の11万7千件で、小学生の中では小学2年生が多い。
  - いじめの内容は暴力ではなく、ひやかし、からかい、おどしが多い。  
からかいにはHSP、SOGIの障害やステップファミリーなどのクラスメイトの家庭背景を揶揄する言葉として使用するケースもみられた。
  - いじめを深刻化させるものは、「シンキング・エラー」及び「アンバランス・パワー」。  
シンキング・エラーとは誰かを傷つけても「遊びだ」「そうしていい権利がある」という誤った認識であり、アンバランス・パワーとは肉体的、知性、社会性の優位性。  
後者には、障害やHSP（HSC）、SOGIや人種などのダイバーシティ、貧困やステップファミリー、被虐待や被DVなどの生育歴や家庭環境なども関係してくる可能性が高い。
  - 「セカンドハンド・ストレス」とは、誰かに怒られたり嫌がらせされたりして直接的に受けるストレスではなく、イライラしたり怒ったりしているストレス状態にある他人をみたり、その声を聞いたりすることで、間接的に受けるストレスのこと。  
傍観する側がそこにいる権利を侵害されているように思う場合もある。  
教室でのストレスは「セカンドハンド・ストレス」の割合も大きい。

- ・ いじめの解決にはダイバーシティインクルージョン（多様性と違いの受容）が鍵となり、また、対応には配慮、平等、環境が重要である。
  - ・ 「隣の芝は青い」という認知バイアスには気をつけなければならない。
- 教育相談のポイント
- ・ 教育相談は、教育コーディネーター、スクールカウンセラー（以下、「SC」と記載）、スクールソーシャルワーカー（以下、「SSW」と記載）が個人的に実践するものではなく、発達支持・課題予防（課題未然防止教育・課題早期発見対応）・困難課題対応の3類4層構造の教育相談が組織的・計画的に実践できる体制づくりが重要である。
- チームとしての取組
- ・ いじめが起こってしまったときは、関係する大人が一丸となって、毅然とした態度で臨まなければいけない。  
 被害者や傍観者には「大人が必ずあなた方のことを守る」といった姿勢をとり続けなければならない。
  - ・ 子どもたちとの関わりを前提に両親・家族や学校、友達、仲間とのバランスを取ることに注視してきたこれまでの考え方から、新たに「地域」を加えたバランスの取り方へとアップデートする。
  - ・ 児童生徒の抱える問題や課題が複雑化・多様化していくなかで、多様な専門職、地域の「思いやりのある大人」が教員とともに学校内で連携・共同していく体制を形作ることが求められている。
  - ・ 学校との協議の結果、現在3町のSSW業務の際に、町の保健師を恒常的に派遣していただくことに快諾を得られた。  
 カンファレンスやコンサルテーションに、子どもや家庭、地域と繋がってきた保健師が参加することで、深いアセスメントがスムーズに進み、両親・家族とのバランスも取られ、関係性も強化されつつある。
- い（生・居・活）場所づくり
- ・ 『い』場所とは、各々の生（生命/生存）・居（居住/生存）・活（活動/活躍）の保証を目的とした【人・場所・仕組み】のこと。
  - ・ 保健室は子どもにとって大人から評価されず、否定されることもない貴重な場。
  - ・ （神奈川県立田奈高校の図書館「ぴっかりカフェ」の紹介。）
  - ・ 家でも学校でもない「サードプレイス」を中学生から切望され検討している。  
 教育委員会や学校にも理解を得ながら、学校の中にサロンのような場所を作る一步を進めたい。
  - ・ 地域社会において、子どもたちの良い成長をサポートするための取組として、親が抱える子育てや発達、いじめ、コミュニケーションなどの課題と解決

のヒントについて、10分～15分程度の動画の作成と配信などを通して、留萌管内市町村を一括りに月に1回～2回を目処に情報発信するこ（YouTube、LINE公式アカウント、X（Twitter））を検討している。

## （2）議題2 意見交流

### ○ 松本推進員

通常の子どもですら危機的な立場にあることも多い、まして障がい児であればなおさら大変なことだと思う。

### ○ 安達委員

改めて勉強させてもらうことが多かった。

シンキング・エラーの場合もそこにおかれた子どもたちの環境（地域、学校、環境）は大事で、その解決のためには、キーとなる大人がいることが重要になるであると理解した。

### ○ 松本推進員

推進員の立場で、改めて小野 Co の「（土台の基礎となる）杭」の話にはっとさせられた。

配慮、公正という観点から、行政サイドはどうしても「平等」な対応になりがちだが、実際現場で求められるのは公平な配慮ではないか。

このような話は皆さんそれぞれの仕事に戻られて役立つと思う。

認識を共有することでエラーも防げるでしょう。

### ○ 小野 Co

学校、行政もそうだが、地域の方は「（問題を抱えた生徒の支援を）行って当然」と思っている。「行ったことがしっかり評価される」「平等にやりとりをする」ということが実現するといいと思う。

### ○ 安達委員

小野 Co は発表するにあたり相当な情報の裏付けと豊富な体験を活かしてくださった。

こちらとしても、断片的な知識で終わらせないために、スキルアップを図っているおすすめの本を教えてほしい。

### ○ 小野 Co

『学校を変えるいじめの科学』は外国の先進的な取組を紹介している。

要点は、人は良い依存をして生きていくということだ。

『人を信じられない病』（小林桜児著）も示唆に富む本で面白い。

### ○ 菊池委員

SWとして、ひきこもりで学校にいけない子どもに対して、どのように思い

を引き出せばよいか、また、どのように子どもと接するといいか教えてほしい。

○ 小野 Co

まずは関係づくりから。日常会話から。

学校には通えなくても、SW が通うことで社会との接点となる。

投げかける言葉が子どもにとってプレッシャーになることもある。

学校に行かないことが心理的に負担だったり、社会と繋がれないことで不安に思っている。

知人の先生からは「学校の勉強はいくらでも取り戻せる」と伺った。

親も気長に子どもとかかわっていくことだ。